第2章

石川 馨先生のご逝去を悼む

雑誌・大会・新聞等の追悼の辞

『品質管理』誌 石川 馨先生追悼号：弔辞

杉 本 辰 夫

謹んで，今は亡き石川 馨さんのご霊に弔辞を捧げます．

あなたは品質管理に関して日本国内ばかりでなく，外国においても，また学界，産業界においても，世にもまれなる卓越した先覚者であり，指導者であり，推進者でありました．その業績は顕著であり，その足跡の偉大さは衆目の認めるところであります．その証左として昭和47年5月にアメリカ品質管理学会グラント賞受賞，昭和63年11月に品質管理関係者として最高の勲二等瑞宝章を叙勲されておられます．

あなたは，「現在一部の日本製品が強すぎるため，国際的な貿易摩擦が起きたり，円高となったり，また先進開発途上国(NIES)の追い上げもあり，日本でも企業が再脱皮しなければならない困難な時期にきている．これらもTQC，CWQC，GWQCを実施することにより，企業の体質改善，新製品開発を行って困難を乗りきっていかなければなるまい．

一方，われわれは，欧米先進国に日本的品質管理の考え方，やり方を普及し，再活性するように協力している．また，発展途上国がさらに強くなるように協

力している．かくして各国がQCを通じて国際的な品質競争を行い，国際分業を進めていくことが，結局世界平和につながる．世界の人々が幸福になることを期待し，QCおよびTQCを推進しているのである」という高邁なる人間愛の人生観に立脚して品質管理を実行されておられました．

あなたと私は，なんとなくうまが合うと言いましょうか，気心が合うと言いましょうか，意気投合すると言いましょうか，考え方も進め方も似たところが多かったように感じておりました．

それは，先輩のあなたに心酔していたため，あなたの考え方，やり方に感化され，あなたに私が同調するようになったためかも知れません．会議をしていても，あなたの意見に私は賛成したり，私の意見にあなたが同調されることが多かったように思います．

『プレジデント』誌から「人間邂逅」の欄に写真と短文の掲載を要請された際に，私はなんのためらいもなくあなたを選びました．私の要請に対してあなたは多忙な時間を特別に割いて池袋のサンシャインビルにおける写真撮影にきて下さいました．その時のあなたとの二人のニコヤカな写真と私が書いたあなたとの出会い，お付合いの様子の短文は私の家の宝になっています．

今はあなたのお姿を見ることも，あなたのお声を聞くこともできません．私の人生にとって巨大な強力な頼りにしておりましたあなたが，お亡くなりになり，ぽっかりした空洞ができ，寂莫さを感じております．

あなたの言われた「会社にいなくてよい人間になれ，しかし，会社になくてはならない人間になれ」は私にとって金科玉条の心得でした．私も品質管理のことで職場を離れることが多かったものですから，この言葉の実践を心掛けました．現在でも会社に在籍しながら品質管理の仕事に精を出すことのできるのは，この言葉の戒めを厳しく守ってきたためと深く感謝いたしております．

あなたが編集委員長で私が副編集委員長をしていた『品質管理』誌に「海外進出企業のための品質管理」講座を企画し，執筆させられたことがあります．このために，私は随分調査し，勉強いたしました．私たちの企業も海外進出をいたしておりますが，この時勉強したことが大変役立っています．特にあなたの主張される「海外進出の場合は日本流のやり方をそのまま押しつけないよう

に，現地の国民性や地域特性に合わせたやり方が大事です」の言葉を肝に命じて実践するようにいたしております．

あなたは，べらんめい口調で話されるので，最初はこわい人と思われがちでしたが，長いお付合いで，あなたの立腹したのを未だかつて一度も見たことがありません．相手を包容してしまう度量の大きさには，ただただ感服するばかりでした．

あなたは，会議を司会しているときに，よく参会者の意見を聞くようにしておられました．しかし，最後はあなたの考えておられるところに結論を集約させていくやり方は，あなたのもっておられる優れた理論体系と人望があったためと考えられます．

あなたの書かれる字はお世辞にもうまいとは言えませんが，書かれている文章の内容が理路整然としていたので，あなたの書かれた文章を校正することは容易でした．

あなたは，私たちと品質管理について車座になって，裸になって，腹を割って酒を飲みながら，午前様になるまで議論をしました．このようなことで，あなたと私たちの同志的絆ができあがり「ノムニケーション」「ツギナシ，オキアリ」などの言葉が生れてきました．

あなたは，海軍士官であったせいか，ノムニケーションで話が佳境に入ってくると，よく“貴様”といわれました．最初はびっくりしましたが，「貴様と俺とは同期の桜」のように，同志に対する呼びかけと理解しました．

あなたの，これらの考え方，やり方を随分学びとって私の仕事の上に活用させていただいたことをここに告白いたします．

ところが，あなたは脳出血で倒れられ，ご家族の献身的なご看病と薬石の効なく，遂に平成元年4月16日午前7時56分，幽明界を異にされました．まことに痛恨の極みであります．

後に残された私たちの戸惑いは隠せませんが，あなたのご遺志を継ぎ努力することをお誓い申し上げます．

ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます．［『品質管理』誌 Vol. 40, No. 8, 1989 所収］

（元『品質管理』誌編集委員長，ダイワ精工取締役相談役）

日科技連英文レポート『Reports of Statistical Application Research, JUSE』：追悼　石川 馨先生

奥 野 忠 一

Reports of Statistical Application Research, JUSE（応用統計学研究雑誌，通称；日科技連英文レポート）の編集委員長でいらっしゃった石川 馨教授は，1989年4月16日に他界されました．このことは品質管理に関係する諸団体にとって大きな損失であり，私はその死に深甚な哀悼の意を表します．

1949年に石川先生はその同僚たちと協力して品質管理に関する研究活動を開始し，1953年にはこの英文レポートが創刊されました．その後，1959年に河田龍夫教授の後を継ぐ形で石川先生がこの雑誌の編集委員長になられました．それ以来30年間編集委員長の責任を負ってこられました．

第二次世界大戦後，統計的品質管理の日本の工業への導入は，このレポートの刊行へ大きな刺激を与え，統計学のこの分野は日本の若い統計学者の心情を強く惹きつけました．

石川先生が編集委員長として貢献されたことの内，もっとも重要なのは，日本の品質管理活動が海外の科学界に広く知られるようにするために日本の研究者が積極的に英語で論文を書くことに目を向けさせたことでありました．この意図は見事に実現し，海外の雑誌に発表された日本の統計学者の論文の数は年とともに増加しました．一方，このレポートは，海外からの寄稿者の割合が多くなりましたことからも明らかなように，国際的な出版物として定着してきました．

このレポートは，もともと統計的理論と方法を取り扱うセクションAの研究論文と，とくに石川先生によって推進された統計的方法の独創的な応用を含むセクションBの工業的品質管理活動に関する報告とを公刊することを目的としておりました．1970年代以降日本のQC活動は高揚期にはいり，総合的品質管

理(TQC)は企業のトップマネージャーから作業者にいたるまでの全員を巻き込む活動となりました．このTQC活動は海外のQCにも目を見張るインパクトを与えました．そこで，石川先生はセクションCを設け，TQC活動，QCサークル活動や統計的方法の工業界全体にわたる応用に関する報告をも掲載することにしました．

石川先生の本誌の編集委員長としての貢献はまことに計り知れないものです．とはいっても，それは品質管理における先生の先駆者的な活動の中ではまことに些少な部分でしかありません．また，日本の品質管理の海外への普及に，先生自身の力を傾注されました．1980年代には，先生の国際的な活躍の場は30カ国以上にも及び，ついには石川先生は「日本的QC活動」の国際的な名士となられました．

先生は次のように表現してそれを信じておられました

すぐれた品質と経済的な製品は世界中でいつも良いことである．

すべての人は性善であり，勉強してよりよくなることを熱望している．

QCは教育に始まり教育に終わる．

TQCは世界中に拡がるべきであり，それは貿易摩擦を減少させるであろう．

石川先生の重要な功績は次のようにまとめられます

1）1962年になされたQCサークル活動の最初の提案．

2）1960年の品質月間の創設．

3）QCに関する種々のシンポジウムやコンファレンスの組織化．

先生は日本で開かれた品質管理国際会議(ICQC)およびQCサークル国際大会(ICQCC)を実行するためのプログラム委員会の委員長などをそれぞれ3回務められました．

贈られた栄誉

デミング賞	1952：デミング賞委員会
グラント賞	1972：アメリカ品質管理学会(ASQC)
シューハートメダル	1983：アメリカ品質管理学会(ASQC)
勲二等 瑞宝章	1988：日本政府

注）本誌の編集委員会は，1989年8月に先生の後任の委員長として奥野忠一を選出しました．新しい委員長は，このレポートの国際的な地位を向上させようという今は亡き石川委員長の方針を引続き継承する意志を表明しました．[『日科技連英文レポート』誌，Vol. 36 No. 2, 1989所収，原文：英文]　（東京理科大学理事・教授　工学部経営工学科）

『QCサークル』誌
故石川 馨編集委員長の遺志を継いで

杉 本 辰 夫

石川先生は品質管理に関して日本の揺藍時代から深く関与され，その後の学習，研究，開発，指導，推進などに尽力されてきました．その業績は顕著であり，残された足跡の偉大さは，万人の認めるところであります．

その中でも，とくに企業の最高権限者であり責任者である社長から，第一線で働く作業員，販売員，事務員に至る各階層の人，そしてすべての部門の人が一つの会社方針にもとづいて，システマティックに実施する全社的品質管理の一環として行うQCサークル活動の提唱と推進は，世界にも例を見ない日本独自の品質管理の方式であり，画期的な効果をもたらすものであります．

つまり，先生は，アメリカから学ばれたテーラーシステムにもとづく品質管理の弱い点を是正するために，すばらしく優秀な知識と意欲をもっている日本の第一線で働く人たちを，単なる労働力としてとり扱うのではなく，その人たちの人間性を尊重したQCサークル活動を誕生させたのです．このQCサークルに対する考えかたは『QCサークル綱領』の「QCサークル活動の基本理念」につぎのように記載されております．

人間の能力を発揮し，無限の可能性を引き出す

人間性を尊重して，生きがいのある明るい職場をつくる

企業の体質改善・発展に寄与する

これらの基本理念は石川先生の思想の表われなのです．先生は，「人間性とは，

第一点は各人が自主性をもって，自分の意志で，自発的に，ヤル気をもって仕事をやっていくことであり，第二点は頭を使い，考えて仕事を行うことである.」と言っておられます．その後のQCサークル活動の普及，繁栄は，ご承知のように日本国内ばかりでなく，海外においてもたいへんなものです．

この偉大な先覚者である石川先生が，忽然として私たちと幽明界を異にされました．あとに残された私たちの戸惑いと失望は避けられません．

私たちは先生の遺志を継いで，今後ますますのQCサークル活動の進展と『QCサークル』誌の拡充に邁進しなければならないと，私は考えております．このためには，QCサークル活動を推進されるかたがたと実行されるかたがたの総力結集が必要と考えますので，関係者のご協力を切にお願い申しあげるものであります．これから自動化，システム化，サービス産業，国際分業などにおけるQCサークル活動が問題になってくるのではないでしょうか．［『QCサークル』誌，No.327，1989所収］　（『QCサークル』誌編集委員長，ダイワ精工取締役相談役）

アメリカ品質管理学会年次総会追悼の辞
故石川 馨先生への賛辞

William A. J. Golomski

1カ月ほど前，日本の友人から石川先生がその日に逝去されたとの報を受け，続いて日本科学技術連盟から詳細な連絡がありました．1989年4月16日，脳出血による死去とのことでした．葬儀は4月24日，東京の増上寺で営まれ，アメリカ品質管理学会からはJ. Douglas Ekings会長が代表として参列しました．

石川先生は応用化学の分野で1958年に東京大学から工学博士号を授与されています．

何が先生を有名たらしめたか？　社内における顧客と供給者の概念を樹立したからか？　粉塊混合物のサンプリングに関する先生の功績ゆえか？　あるいは「石川ダイアグラム」とも呼ばれる特性要因図の創案のためか？　先生はま

た数少ないアメリカ品質管理学会の名誉会員でもあり，また国際品質アカデミーの会長，ISO 理事会のメンバーでもあったからか？　確かにそれもありますが，それ以上に先生が品質改善に大きく貢献し，無駄な努力や材料を削減させ，お陰でわれわれも年々向上してくることができたからです．また先生は，人類に何が役立つかを知っていたからです．

1976 年に東京大学教授を退職されてから，くつろいだ余生を過ごす方が先生のためには良かったかもしれませんが，その後 2 年間，東京理科大学に教鞭をとり，その間広く海外活動も行われました．先生は「日本人は第二次世界大戦後に日本がアメリカから得た援助に対し深い感謝の念を示したいのです」と言われていました．

こうした先生の活動により貧困が軽減しました．人々は仕事の問題点を認識できるようになり，従業員は自分の職務に興味を持つようになりました．先生の話や用いた手法により，人々はますます仕事に専心するようになり，勤勉になりました．

1978 年に東京理科大学から武蔵工業大学に移られ学長に就任されました．そうしてご逝去に至るまでその任務を遂行されました．

先生はご自分の仕事に常に誠心誠意取り組まれました．たとえば北アメリカを訪問された際も，多くの人々を惜しみなく援助されました．また先生は人間の行動や人間関係に関する深い知識をお持ちであり，先生の熟練ぶりや創造力は今でも記憶に残っています．私たちは先生のご自宅で受けたもてなしに感謝しています．また先生は「一生懸命に働かなくてもよいから，カッコよく働きなさい」などと言われる方ではなかったし，日本人が世界一の品質を達成するために必要であったハードワークに対し正面から取り組まれました．

石川先生がおられなかったならば，品質管理(Quality Control)の実務に対して先生のなされてきたような貢献はなかったでしょう．私は今，敢えて Quality Control という言葉を使いましたが，それは先生が言われていた日本的 Total Quality Control を意味するからです．

先生は世界中を旅行し，品質に関する会議に出席されていましたので，われわれの多くは毎年，偉大な先生にいつお目にかかれるか楽しみにしていました．

先生のご家族や，大学の同僚，日本科学技術連盟や日本品質管理学会の先生の仲間とともに，先生のご逝去を悼み，先生とともに過ごした年月を賛美いたします．

先生のお陰でわれわれは成長しました．私たちはこの成長の旗を運び続けなければなりませんが，それを私たちはきっと成し遂げるでしょう．

起立して先生に黙禱を捧げましょう．

ありがとうございました．[原文：英文]（元アメリカ品質管理学会会長，現在ゴロムスキー・アソシエイツ社長．国際品質アカデミー会員）

注）この賛辞は，1989年5月8日，トロントで開催されたアメリカ品質管理学会(ASQC)年次大会の開会式冒頭で述べられました．3000人近くの参加者が一斉に起立しての黙禱は大変感動的でした．なおGolomski氏はシカゴ工科大学ならびにイリノイ工科大学で非常勤教授を勤めるアメリカの品質管理界の重鎮で，石川先生とは30年来の親しい友人でありました．

日本品質管理学会誌『品質』
石川先生を悼む

日本品質管理学会

石川 馨先生は1988年1月，腸の手術をされ，以後療養に努められ，漸時回復の途にあったところ，突然脳出血のため不帰の客となられました．

先生が東京大学を定年ご退官になる直前にも体調をくずされたことがありましたが，不死鳥のごとく立直られ，以後10年あまり，武蔵工業大学長の要職に身を置かれながら品質管理の指導，発展に壮者をしのぐご活躍をなさっておられました．今回も同様のご回復を期待したのでありますが，これが実現しなかったことは死生命ありとはいえ，痛恨の極みであります．

先生が日本の品質管理の発展のため文字通り粉骨砕身努力され，清濁あわせ呑み，日本の品質管理を築きあげられた偉大な指導者であったことは，だれし

も否定し得ない事実であります．まさに“巨星墜つ”の感があります．

今日，日本の工業さらには品質管理の変革が求められている時期に先生を失ったことは極めて大きな損失であります．幽明界を異にし，もはや先生の謦咳に接し得ないことを思うときに哀惜の念にたえません．

先生は言葉の議論はお好きではありませんでした．TQCとは何か，品質保証とは何かといった議論はおやりにならず，企業にとって必要なこと，日本にとって必要なこと，さらには世界にとって必要なことを実際の現場の中に見出され，どんどん実践に移してこられました．品質管理は，理屈よりも実践を優先させるべきであることを身をもって示されたのであります．管理図，抜取検査など製造管理の一技法でしかなかった品質管理活動は，現在において，商品企画から設計・製造・アフターサービスにわたり，トップマネジメントから一般従業員までの参画による，企業活動の中の極めて大きな部分を占めるまでになっております．品質管理の発展は，従来の経営管理技術の革新をもたらすところとなりました．先生の残された大きなご業績をしのぶ時，後に続く者はそれを維持し，発展させる義務と責任の重さに身の引き締まる思いがいたします．

先生は第二次大戦後の日本の経済復興を双肩に担って尽力された偉大なリーダーの一人でありました．“倒れて後止む”は先生のための言葉であります．ここに衷心より先生のご冥福をお祈り申し上げます．ゆっくりお休みください．先生は十分にお働きになりました．

［『品質』誌，Vol.19，No.2，1989所収，執筆：久米 均］

アメリカ品質管理学会誌『Quality Progress』石川 馨博士追悼　品質のオーガナイザー

Nancy A. Karabatsos

「QC と共に歩んできた私の生涯を振り返ってみて，以下に述べることが私の希望であり願いである．世界中に QC および QC サークル活動を普及することにより，世界中の品質が向上し，コストダウンとなり，生産性が向上し，省資源・省エネルギーとなり，世界中の人々が幸福となり，世界が繁栄し，平和な世界になることを期待している．」

博士のその揺るぎない地位を確固たるものとした著書”What is Total Quality Control？ The Japanese Way”（邦題『日本的品質管理』）はこの一節で始まり，博士を敬愛する人々や研究者仲間は，しばしばこの一節と共に博士を追想します．

今までに特性要因図（魚の骨あるいは石川ダイアグラムとも呼ばれている）を使ったことがあるならば，あるいは，QC サークル活動に参加したことがあるならば，その人は，石川博士が世界中の人々のために残された遺産と関わりを持った事になります．あらゆる階層の，あらゆる産業の人々が仲間と一緒に問題解決をしたり，改善，協力，教育を行う際，立ちはだかる障害を取り除くのにやさしい手法を使うことができたらというのが博士のお望みでした．

博士の理想の実現へのご尽力に対し，デミング賞，勲二等瑞宝章，博士が名誉会員であられたアメリカ品質管理学会からはグラント賞，シューハートメダルの最高の栄誉が贈られました．

1939 年に博士は東京大学を卒業後，海軍の技術大尉になられるまでしばらくの間，日産液体燃料に勤務しておられました．その後東京大学の助教授として教鞭を執られる一方，1949 年に結集された日科技連の品質管理リサーチ・グループの指導を始められました．“What is Total Quality Control？The Japanese

Way”で当時の事を次のように回想されています.

「日科技連に統計的方法の文献があるというので貰いにいったところ，当時の専務理事小柳賢一氏が強引な人で，QCリサーチグループに入って指導講師をやらなければ，文献をあげられない，という．私はこれから勉強するところだから講師などできないというと，皆もこれから勉強するところだから大丈夫だと強引にQCに引っ張り込まれてしまったのである．そして統計的手法とQCを勉強してみるとこれはなかなか面白い．日本の産業復興に役立つと思って，本格的に始めたのである.」

このようにして石川博士は，日本の品質管理の数多くのパイオニア達の仲間入りをされました．博士は日科技連の主催する品質に関連したコースのほとんどを指導なさり，品質関係のコースは購買・販売部門に対しても行われなければいけないと気が付かれました．博士の貢献は，すぐに認められ1952年品質管理リサーチ・グループのメンバーとともにデミング賞が授与されました.

石川博士が最初の特性要因図を開発されたのは1953年のことでした．博士の著書“Guide to Quality Control”で，川崎製鉄の現場の作業員に問題を解析し理解してもらうためにこの要因図を使ったと説明されています．この図は，魚の骨に似ているためしばしばそう呼ばれていますが，原料，方法，機械(設備)，測定方法などによっておこる問題の要因をつきとめるものです．それ以来この図は世界中に広まり，製造業，サービス産業の両方で現場の人々によって繰り返し用いられています.

「QCはお互いに交流し影響しあうことから始まる.」

とし，博士はそのフィロソフィーの最頂点に達した状態はQCサークルの世界的な広がりであるとされています．博士と日科技連の研究者仲間たちは，1950年代の初め，チームワーク概念の導入を始めました．1962年『現場とQC』誌4月号(創刊号)でその概念を正式にQCサークルと名付けました．その時以来博士は，著書や個人的な指導を通して世界中にサークルの概念を普及するのに大きな役割を果たされたのでした.

サークルの広まりは博士にとっては驚きであり，それを使う人々にとっては効用の大きいものでした，先生のご著書“Quality Control Circles at Work”

の前書で博士はこう述べています.

「QCサークル活動は，極めて日本的な特色である．欧米に比べプロフェッショナリズムが弱い，企業別労働組合，年功序列型給与制度，終身雇用制，宗教，伝統等によっても助成されてきた．けれどもこれは本質的要素ではない．最初は仏教／儒教伝統のない，東洋以外の国ではQCサークル活動は行えないと思っていた．しかし，最近西欧の多くの国を含む40以上の世界の国々でQCサークル活動の成功例を見てきた．このことは私の見方を変え，ほんの少しそれぞれの文化背景に合わせるよう手直しすることにより，QCサークル活動は世界中どこでも成功すると考えるようになった．人間は人間である．人間性を尊重する限り，QCサークル活動は世界中どこでも行える.」

石川博士の教え子や研究者仲間は，先生が偉大なコーディネーターであり，現場の人々が平易な手法で問題を解決できるよう励まし指導して下さったすばらしい方であったと偲んでいます．博士はいわゆる七つ道具(特性要因図，ヒストグラム，チェックシート，パレート図，管理図・グラフ，散布図)を提唱なさいました．これらの手法によってほとんどの問題が解決できると述べておられます.「先生のおっしゃることを理解するのに20年かかりました．弟子の立場からいったら，七つ道具というのは簡単すぎてちっとも面白くなかった．けれどもそれで95％の問題が解決できると先生はおっしゃるんです.」と東京理科大学の狩野教授は回想されています.

石川博士は日本の経済史上，革新世代の重鎮としても思い出されます．京都大学名誉教授，近藤良夫先生は次のように述べておられます.「石川先生はアメリカの手法を研究し，それを日本の環境にあったように取り入れて行こうとするなか，極めて重要な役割を果たされました.」博士の博識さに多くの人々は啓発され，学習への意欲を駆り立てられました．近藤先生は1951年 SQCセミナーで石川先生にお会いになり,「先生があまり色々なことをご存知だったもので，これはすごいと思いました.」と当時のことを思い出されています.

最後になりましたが，石川博士は日本のQC専門家の偉大なコーディネーターでもあったと回想されることでしょう．日本においては，その効力を最大限に

活かすには，専門家が個々に活動するのではなく，彼らの力を結集して行くことが重要であると確信しておられました．狩野教授は，“清濁併せ呑む”と博士を評され，人々を一致団結させることに秀でていらっしゃったと語られています．清の部分は述べるまでもなく，先生は政治がらみのことや人々のわだかまりなどの仲裁役としてもそのすばらしさを発揮されました．

博士のお仲間は，先生の羽目を外された姿も楽しそうに回想されます．どのように思い出されますかと尋ねると，近藤先生は，「お酒が好きでよく夜中まで飲んでおられましたよ．」と，また狩野教授は「先生は聖人なんかじゃないんだ．人間の中の人間なんだよ．」とそれぞれ偲んでいらっしゃいました．

［アメリカ品質管理学会（ASQC）学会“*Quality Progress*”誌，1989年6月号所収，原文：英文］（Quality Progress 誌編集長）

『朝日新聞』：日本のQC生みの親 故石川氏 経営革新目指す

「メード・イン・ジャパン」を世界最高品質に押し上げた日本の総合的品質管理（TQC）．その生みの親で，世界的権威だった石川 馨（かおる）武蔵工業大学学長（東大名誉教授，石川六郎日商会頭の実兄）が帰らぬ人となった．石川氏は「品質の向上こそコストの低下をもたらす」「経営トップこそQC運動の先頭に立つべきだ」と訴え続け，製造業の発展に貢献した．

品質管理技術は第二次大戦直後，米国から導入された．当時は作業現場の管理技術に過ぎず，「労働者はミスをする，手抜きをする」という見方に立った管理手法だった．これに対し，日本に適する体系を研究していた石川氏は，職場ごとに品質管理について提案し合う小集団をつくり，全員が参加する総合的品質管理体制を創案した．

昭和35年に日産自動車が品質管理を表彰する「デミング賞」を受賞した時，工場を視察した石川氏は，説明が担当者任せだったのに怒り，当時の川又克二

社長(故人)以下役員を集めてしかった．この話は，石川氏のTQCが単なる品質管理技術ではなく，経営革新を目指すものであることを示している．

石川氏は，父親の故石川一郎初代経団連会長同様，歯切れよくものを言った．昭和31年(編者注：昭和33年(1958年)の誤り)，ワシントンでは「米国のQCはなっていない」と言い放った．教えを垂れようとしていた米側は「目を白黒させるばかりだった」と，同行した唐津一東海大教授は思い出す．石川氏は，アメリカ品質管理学会でただ一人の米国人以外の名誉会員でもある．後輩の久米均東大教授は「日本より米国での評価の方が高いくらいだ」といっている．

[1989年4月18日(火)所収]

『読売新聞』:「品質管理」の世界的権威

石川 馨氏(いしかわ・かおる＝武蔵工業大学長，東大名誉教授・経営工学)16日午前7時56分，脳出血のため，東京都調布市の調布東山病院で死去．73歳．告別式は武蔵工大，日本科学技術連盟の合同葬として24日午後2時から港区芝公園4の7の35の芝増上寺大殿で．自宅は調布市飛田給2の11の1．葬儀委員代表は古浜庄一・武蔵工大副学長，鈴江康平・日本科学技術連盟理事長．喪主は長男，忠(ただし)氏．

工業製品の品質管理(QC)の世界的権威．戦後間もなく日本科学技術連盟の品質管理研究グループに参加，工業規格の制定に尽力するとともにTQC(全社的品質管理)を提唱した．教育，普及のため同連盟にQCサークル本部を創設し，各工場のサークル指導に当たり，わが国の工業製品の品質を世界のトップクラスに引き上げた．QC運動は各国に，“輸出”され，その功績からデミング賞，アメリカ品質管理学会グラント賞などを受賞した．『日本的品質管理』など著書多数．

元経団連会長の故石川一郎氏の長男で，弟に石川 潔・三菱石油会長，石川六郎・日商会頭．昨年11月，勲二等瑞宝章を受賞．[1989年4月17日(月)所収]

ご供養のための写経
（飯嶋弘・千鶴子ご夫妻書写）